

1 単元名 古代までの日本  
 「文明の起こりと日本の成り立ち」(全7時間) 高山市立松倉中学校 谷口 陽一

2 単元のねらい

人類が出現し、やがて世界の古代文明が生まれたこと、また、日本列島で狩猟・採集を行っていた人々の生活が農耕の広まりとともに変化していったことを理解させる。  
 国家が形成されていく過程のあらましを、東アジアとのかかわり、古墳の広まり、大和国家による勢力の拡大を通して理解させる。その際、当時の人々の信仰、大陸から移住してきた人々の日本の社会に果たした役割に気付かせる。

3 単元で培いたい学び方

人類が生活の必要に迫られて様々な工夫を重ね地域を越えて交流したりせめぎ合ったりするなかで文明や文化を発展させ国家を形成したことに関心を高めるとともに、文化の発展や国家の形成を“集団内の工夫”や“東アジアや日本列島における集団間のかかわりあい”と結びつけて理解する学び方。

4 内容のまとめりごとの評価規準 歴史的分野の内容(2)「古代までの日本」ア・イ

ア 社会的事象への関心・意欲・態度	イ 社会的な思考・判断	ウ 資料活用の技能・表現	エ 社会的事象についての知識・理解
国家の形成と天皇の政治の展開のあらましや文化などに対する関心を高め、意欲的に追究し、文化遺産を尊重しようとする。	国家の形成と天皇の政治の展開のあらましや文化などから課題を見だし、歴史の流れと時代の特色を多面的・多角的に考察している。	国家の形成と天皇の政治の展開のあらましや文化などに関する様々な資料を収集し、適切に選択して活用するとともに、追究し考察した結果をまとめたり、説明したりしている。	国家の形成と天皇の政治の展開のあらましや文化の特色などを、我が国の歴史とかかわる東アジアの歴史を背景に理解し、その知識を身に付けている。

5 単元の評価規準

	ア 社会的事象への関心・意欲・態度	イ 社会的な思考・判断	ウ 資料活用の技能・表現	エ 社会的事象についての知識・理解
単元の評価規準	人類が文明や文化を発展させてきたこと、日本列島において人々の生活が発展したことに対する関心を高め、意欲的に追究し、文化遺産を地域にもある身近なものとして尊重しようとしている。  国家が形成されていく過程のあらましに対する関心を高め、意欲的に追究し、文化遺産を地域にもある身近なものとして尊重しようとしている。	人類が文明や文化を発展させてきたことに関して、東アジアや日本列島の他の集団・国とのかかわりを通して、歴史の流れと時代の特色を多面的・多角的に考察している。  国家が形成されていく過程のあらましに関して、東アジアや日本列島の他の地域・国とのかかわり、古墳の広まり、大和国家の勢力拡大を通して、歴史の流れと時代の特色を多面的・多角的に考察している。	人類が文明や文化を発展させてきたこと、日本列島における人々の生活が発展したことに関する考古学の成果をはじめとする様々な資料を収集し、適切に選択して活用するとともに、追究し考察した結果をまとめたり、説明したりしている。  国家が形成されていく過程のあらましに関する考古学の成果や文献などの様々な資料を収集し、適切に選択して活用するとともに、追究し考察した結果をまとめたり、説明したりしている。	人類が文明や文化を発展させてきたこと、日本列島における人々の生活が発展したことを、我が国の歴史とかかわる東アジアの歴史を背景に理解し、その知識を身に付けている。  国家が形成されていく過程のあらましを、我が国の歴史とかかわる東アジアの歴史を背景に理解するとともに、当時の人々の信仰、大陸から移住してきた人々の我が国の社会に果たした役割に気付き、その知識を身に付けている。
学習活動における具体的な評価規準	[第1時] 大型動物の捕らえ方について、工夫したり協力したりする様子を具体的に思い描き、日本列島でも同じであること、日本に国ができていくことに関心を高めようとしている。  [第7時] 前方後円墳の分布や大きさから、5世紀の大和国家が連合国家であり、その後支配力を強めた大和朝廷がどのように国づくりを進めたか関心を高めようとしている。	[第4時] 卑弥呼が魏帝の臣下になった理由について、魏の強大さや匈奴との争いなどを関連づけて考察し、周辺諸国にとって中国の臣下になる利点が大きかったと判断している。  [第6時] 両面宿禰の記述と伝承について、内容の矛盾をふまえてどんな事実があったのか考察し、大和国家が飛騨などの各地方を組み込んで勢力を拡大していったと判断している。	[第2時] 土器などの遺物や挿絵から各時代の特徴を対比し、まとめ、発表し、防御施設が獣や災害ではなく人の攻撃から守るための物であったことをその構造から読みとっている。  [第5時] 古墳の規模や副葬品についての資料から被葬者が権力を持つ人だととらえ、前方後円墳の分布範囲を大和国家の勢力範囲だととらえている。	[第3時] 大陸からの人の移住により弥生時代の急激な発展が起きたことや、日本に影響を与えた中国の古代帝国・農耕を伴う文明について知識を身に付けている。

時	ねらい	学習活動	評価規準	評価方法	資料及び指導・援助
1	マンモスの捕らえ方を多面的に考え、妥当かを多角的に吟味する活動を通して、人類は食料を手に入れるために考えたり協力したりする中で石器・火・言葉などの文化を進展させてきたこと、日本列島でも同じであること、その後日本列島でも国ができていくことに関心を高めようとするができる。	<p>1, ウクライナでの発掘成果から、本時の学習課題を設定する。 ・数万年前の石器と数百体分のマンモスの骨 食べていた。 マンモスの骨 全長5.4m。(教室の壁と比較) <b>こんなに大きなマンモスをどのようにして捕らえたのだろう。</b></p> <p>2, いろいろな可能性を考え、妥当かどうかを吟味し合う。 道具(打製石器・木器)の工夫、火や毒を使う 罠(落とし穴・沼や崖に追い込む・エサでおびき寄せる) 言葉を駆使して考え、工夫し、協力したに違いない。 ・歴史学者の議論も同様に同じようになされ、発掘成果により仮説が検証され修正されてきた。アリゾナ・野尻湖の発掘例。</p> <p>3, 彼らは細かい意志まで伝えられる言葉を話していたか。 言葉を話していた彼らは、国をつくっていたか。</p> <p>4, 当時はまだ国がないが、現在は国がある。 ↓ 単元を貫く課題 日本に住んでいたヒトは、どのように文化を進展させ、国としてのまとまりをつくってきたのだろう。</p>	ア - 大型動物の捕らえ方について、工夫したり協力したりする様子を具体的に思い描き、日本列島でも同じであること、日本に国ができていくことに関心を高めようとしている。	[発言・ノート] マンモスの捕らえ方の工夫や協力について自分の予想をより具体的にしているか、日本列島の様子が日本に国ができていく過程について関心を高めようとしているか分析する。	資料集P4 ウクライナのメジリチ遺跡、マンモスの骨の家(1頭1500食分) マンモスの絵 マリタ遺跡 米アリゾナ州で打製石器がいくつも食い込んだマンモスの骨が出土 野尻湖の発掘... 骨がバラバラの状態ですれほど離れずに石器や骨器も出土 獲物を解体した跡
		人類は、マンモスのような大型動物などを食料とするために考え協力するなかで、道具や火の使い方を工夫したり言葉を発達させたりしたのだと思った。日本でも同じように道具や火の使い方を工夫したり言葉を発達させたりしたのだろう。まだ国としてまとまりのない日本で、その後どんなふうに国がつけられるのだろう。			
2	縄文文化や弥生文化について実物などの資料からそれぞれの特徴を読みとったり、両者を対比してまとめたりする活動を通して、弥生文化は縄文文化と異質で「稲作などの新しい技術や文化が広まるのに伴い起こった略奪」から米などを守るうとする中で育まれた文化」だととらえることができる。	<p>1, 地域での発掘成果から、縄文土器・弥生土器や石器を提示。 縄文土器・「縄文時代のむらの生活」と弥生土器・「弥生時代のむらの生活」などを見てそれぞれの特徴をみつけよう。</p> <p>2, まず縄文時代、次に比較しつつ弥生時代の特徴をみつけよう。 (発言を分類し、有用な情報に注目できるように助言する) 貝塚・土偶[縄文時代] / 金属器(銅鐸 他)[弥生時代] 土器 : 厚く柔らかいから、薄く堅いへ(より高温の焼成) 石器 : 矢尻は小から大へ(殺傷力が増す) 木工技術: 焼き削った丸木船から、割った矢板へ 食糧確保: 狩猟や採集中心から、稲作中心へ 建物 : 竪穴住居から、掘立柱建物(倉庫群・櫓等)増加 むらのづくり: 出入り自由から、濠や柵で囲んだむらへ</p> <p>3, <b>むらを囲む濠や柵は、何のために造ったのだろう。</b> “奪いに来る人たち”から“稲作をして貯蔵している米や金属器などの新しい宝物や道具”を守るために造った。 ・吉野ヶ里遺跡などの、防御施設と戦いで傷ついた人骨の例。</p> <p>4, 縄文時代、弥生時代のむらの人口は、数十~数千人規模。</p>	ウ - 土器などの遺物や挿絵から各時代の特徴を対比し、まとめ、発表し、防御施設が獣や災害ではなく人の攻撃から守るための物であったことをその構造から読みとっている。	[発言・ノート] 根拠とする資料について明示し、時代の特徴を対比し、まとめ、発表したか、防御施設を造った理由を稲作に伴う争いの文化と関連づけてとらえているか分析する。	市町村教委の所蔵土器等を借りる 教科書挿絵P20 教科書挿絵P21 他 ・日本最古の稲作は縄文晩期 佐賀県吉野ヶ里遺跡(弥生): 深さ3m×幅7mの二重の環濠、首切断人骨や矢尻が打ち込まれた人骨出土
		私達の地域にも縄文時代や弥生時代にヒトが住んでいたことに驚いた。縄文土器に比べ弥生土器は堅く薄く、その他にも技術が進歩したのだとわかった。稲作が広まり米を保管するようになったため、奪いに来る人々から米や金属器などを守るために、櫓を建て濠や柵で守りを固めたむらを造らざるを得なかったのだろう。			
3	弥生文化が短期間に高度に発展した理由を探る活動を通して、大陸から移住した人々が稲作を伴う文化を持ち込み日本に根付いたこと、弥生文化に直接影響を与えた中国の古代帝国やその前史に農耕に伴って発展した古代文明があったことを理解することができる。	<p>1, 縄文 弥生へ技術革新があった。目盛りの正しい年表で提示。 約1万年かけ発展した縄文文化から、100年ほどで急激に発展。 <b>短期間に高度に発展し、稲作が広まったのはどうしてだろう。</b></p> <p>2, 稲作が伝わってすぐに、高度な技術で造られた水田がある。 縄文土器と同時に、朝鮮半島と同じ作り方の土器も少数出土。 弥生人の骨格は、縄文人と違っていたり似ていたり地域差有。 朝鮮半島や中国から移住した渡来人たちの文化が、日本列島にあった文化とまざり根付いて弥生文化になったのだろう。</p> <p>3, 菜畑遺跡から出土した炭化米は、遺伝子DNA分析すると、現在の一般的な温帯ジャポニカ種ではなく熱帯ジャポニカ種。 長江中流から下流で紀元前4000年ごろから行われていた稲作が日本に伝わった可能性が高い。</p> <p>4, <b>日本に影響した中国の古代帝国や文明についてまとめよう。</b> 秦・漢 中国には縄文晩期~弥生初期に古代帝国があった その前史には、川のほとりで農耕をおこなった文明があった</p>	エ - 大陸からの人の移住により弥生時代の急激な発展が起きたことや、日本に影響を与えた中国の古代帝国・農耕を伴う文明について知識を身に付けている。	[ノート] 大陸からの人の移住と弥生時代の変化とを因果関係ととらえ、中国の古代帝国や川・農耕(争い)により発展した文明について記述しているか分析する。	佐賀県菜畑遺跡 : 高度な最古水田(後掲) 北部九州の弥生人骨身長約163cm, 南部九州の弥生人骨約159cm 縄文人骨, 地域差あり 稲作の起源 地図帳 教科書P18~19 他
	「発展」は問題を克服しようとしたとき起こる	弥生文化が短期間に高度な発展をとげたのは、朝鮮半島や中国から人々が移り住み、稲作を伴う文化が日本に根付いたからだとわかった。その稲作の始まりは中国だと考えられ、大河流域で農耕に伴って文明が誕生した中国には、そのころ古代帝国ができていた。日本にも同じように国ができていくのだろうか。			

時	ねらい	学習活動	評価規準	評価方法	資料及び指導・援助
4	卑弥呼が国々を従え力をふるっているにもかかわらず魏の臣下になった理由を探る活動を通して、卑弥呼は魏の強大な国力を利用して狗奴国に対抗しようとし、東アジアの国々は貢ぎ物をした国に印綬や財宝を与えていた中国の力を利用して勢力を伸ばそうとしていたと判断することができる。	<p>1, 3世紀、中国に魏・呉・蜀の三国。「魏志」倭人伝。 ・邪馬台国の様子や卑弥呼の支配力が強かった事を読みとる。 「卑弥呼は支配力が強いのに、どうして魏の臣下になったのか。」</p> <p>2, 可能性を予想して出し合い、その後資料を根拠に議論する。 魏は文化が進んでいるので、[文化]を手に入れたかった 魏は豊かなので、鏡100枚などの[財宝]を手に入れたかった 魏は強大な国なので、魏の[権威]を後ろ盾としたかった 魏は軍事力が強いので、魏の[武力]をあてにしていた 狗奴国と[争い]を続けており、より強い国になりたかった 狗奴国との戦況が不利になったとき魏へ使者を送ると、魏は軍事顧問を派遣し、魏の軍旗(黄幢)などを下賜した。</p> <p>3, 中国は世界の中心たる国として、貢ぎ物を捧げた国に対して、すぐれた臣下と認めると、位と印綬(金印)を下賜していた。 「日本などが下賜された印について教科書・資料集で調べよう。」 北九州で出土「漢倭奴国王」/卑弥呼の金印は未出土/他それぞれが中国の力を利用して勢力を伸ばそうとしていた</p> <p>4, 邪馬台国の人口は、数万~数十万人規模(七万余戸)</p>	イ - 卑弥呼が魏帝の臣下になった理由について、魏の強大さや狗奴国との争いなどを関連づけて考察し、周辺諸国にとって中国の臣下になる利点が大きかったと判断している。	[発言・ノート] 卑弥呼が魏帝の臣下になった理由は、魏の国力を争いに勝つためだったととらえているか、周辺諸国にとって中国の利点が大きかった事に注目しているか分析する。	教科書P27 資料集P16 倭人伝より倭人伝プリント(後掲) 魏の強大さを示す地図や資料  教科書P26 資料集P16 「漢倭奴国王」 金印：一辺2.3×高さ0.8cm 蛇の鈕
	(中国の冊封体制を周辺諸国を中心にとらえる)	卑弥呼は、中国の進んだ文化・財宝・権威・武力を手に入れて、強大な中国の力を背景に争いに勝ち邪馬台国の勢力を伸ばそうとしたのだろう。日本は卑弥呼以前にも金印を下賜されており、中国の周辺でも印を下賜されていた。日本など中国周辺では、中国の力を利用して、次第に大きな国をつくっていったのだと思う。			
5	古墳の規模や副葬品などを調べる活動を通して、被葬者が大勢を従える力を持った権力者であり大陸と結びついた進んだ文化を持った人であったことを読みとり、古墳の形の変化から大和國家が勢力を広げていったことを読みとることができる。	<p>1, 地域にある古墳(円墳・前方後円墳)や大仙古墳の形(前方後円墳)大きさ等を示し、墓として作られた事を伝える。 「これらの大きな墓には、どんな人が埋葬されたのだろう。」</p> <p>2, 規模や石室、副葬品などについて、調べまとめる。 権力を持った人、大王、金持ち、 大勢の人を動かして巨大な墓を作らせることができる人、 朝鮮半島や中国との結びつきがありその文化を持った人、 前方後円墳の文化を持つ国を大和國家という。 初期の前方後円墳は近畿地方の文化圏を中心に分布。</p> <p>3, 愛知県では4世紀初頭まで前方後円墳が造られるが、その後造られなくなり、かわりに前方後円墳が造られるようになる。 「愛知県ではどうして古墳の形が変わってしまったのだろう。」 大和國家の文化を受け入れた/大和國家の支配下に入った</p> <p>4, このころの大和國家の人口は、数十万~数百万人規模</p>	ウ - 古墳の規模や副葬品についての資料から被葬者が権力を持つ人だととらえ、前方後円墳の分布範囲を大和國家の勢力範囲だととらえている。	[ノート] 古墳の規模や副葬品の具体的な事実を被葬者の権力などと結びつけているか、前方後円墳の広がりや勢力範囲と結びつけているか分析する。	地域にある古墳の規模・副葬品 大仙古墳(大阪府堺市):5世紀の前方後円墳。全長486m、高さ35m。 金銅装甲冑・ガラス壺・皿など出土 教科書P28~29 五味・高埜・鳥海『詳説日本史研究』山川出版社 P30 愛知県の主要古墳変遷図
		古墳のような大きな墓に埋葬された人は、大陸の進んだ文化を取り入れ、強い権力をもちたくさんの人を動かした人なのだと、資料を見てわかった。前方後円墳という墓の文化をもつ大和國家は、近畿地方に中心があり勢力をすくなく広げていったことが資料からわかった。そうやって大きな国をつくっていったのだろう。			
6	前方後円墳があることから飛騨も大和國家に組み込まれたとわかり、大和國家の記録と飛騨地方などの伝承における両面宿禰の違いを比較する活動を通して、大和國家は飛騨など各地のリーダー的存在の人・王を討ったり協力体制を結んだりして勢力を広げていったと判断することができる。	<p>1, 飛騨の前方後円墳(6世紀) 大和國家に組み込まれた</p> <p>2 『日本書紀』に徳天皇65年(5世紀)の宿禰の記述を示す 大和國家では、宿禰をどんな人だと考えていたのだろう。 不思議な人……化け物? 双子? 二人かと思うほど強かった? 恐ろしい姿の悪い人 飛騨の宿禰という悪い人が人民を略奪するので、武振熊が攻めて殺した</p> <p>4, 宿禰は飛騨で尊敬されており、リーダー的存在・王だった 大和國家にとっての宿禰と、飛騨にとっての宿禰の違いから大和國家と飛騨とにあった出来事やその関係を推測しよう。 大和國家は飛騨が逆らったので武力で支配した 大和國家は宿禰から学び、飛騨は大和國家に協力した どちらかにより、飛騨は大和國家に組み込まれていった</p>	イ - 両面宿禰の記述と伝承について、内容の矛盾をふまえてどんな事実があったのか考察し、大和國家が飛騨などの各地方を組み込んで勢力を拡大していったと判断している。	[ノート] 両面宿禰についての記述と伝承の矛盾に注目して、大和國家と飛騨との間にどんな事実があったのか考察し、大和國家が勢力を拡大していったと判断しているか分析する。	信包八幡神社古墳(吉城郡古川町)6世紀、全長64m  『日本書紀』 仁徳天皇65年 宿禰の伝承は、 廣田・桐谷『飛騨の鬼神 両面宿禰の正体』叢文社 P26など
		両面宿禰について、大和國家と飛騨地方などでのとらえ方が全然違うので驚いた。立場が違うと歴史の書き方まで違ってくるのだと思った。両面宿禰のころ(5世紀)に大和國家と別の国だった飛騨は、大和國家に組み込まれて前方後円墳を造るようになったのだろう。そうやって大和國家は勢力を拡大していったに違いない。			

時	ねらい	学習活動	評価規準	評価方法	資料及び指導・援助
7	前方後円墳の分布図から埋葬された人たちの力関係を推測する活動を通して、5世紀頃の大和國家は大和朝廷による強い支配のない連合國家であり、大型古墳が減少したのは朝廷の支配力が強くなったからだとわかり、その後の国づくりについて関心を高めようとする	<p>1, 前方後円墳は、大和國家で権力を持っていた人の墓。 大仙古墳とほぼ同じ5世紀ごろに造られた、100mを越す大きな前方後円墳は、日本全体にどのように分布しているだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・予想を立ててから資料を検討する。 大王がいた近畿地方に多い/近畿地方とその周辺に多い/近畿地方だけでなくほぼ全国にある</li> <li>5世紀(古墳時代中期)の大型古墳の分布図を示す。 大きな前方後円墳は近畿地方だけでなく各地に分布 近畿地方のは特別大きい、群馬県にも大きいがある</li> </ul> <p>2, 分布から大和國家のリーダーがどこにいたか推測しよう。 各地に権力を持った人が、近畿地方に特に強い人がいる 近畿地方では数が多いので、大王ではない人の墓もある 大和國家は朝廷による強い支配関係はなく、豪族の連合國家。</p> <p>3, 6~7世紀になると、近畿地方中央部だけで大型古墳。近畿地方や各地では小型古墳・群衆墳。仏教による火葬の広がり。 各地の権力者が衰え、中央の支配力が強く及ぶようになった。</p>	ア - 前方後円墳の分布や大きさから、5世紀の大和國家が連合國家であり、その後支配力を強めた大和朝廷がどのように国づくりを進めたか関心を高めようとしている。	[ノート] 前方後円墳の分布や大きさから、5世紀の大和國家には各地に権力者があり、その後大和朝廷が国づくりを進めていくことに関心を高めようとしているか分析する。	五味・高埜・鳥海『詳説日本史研究』山川出版社 P32  ノートにまとめや感想を書かせるとき、分析する意図に合わせて書く内容を指示する(全時共通)
		最も大きい前方後円墳は近畿地方にあるが、全国各地にも大きな前方後円墳があり驚いた。大和國家は大和朝廷だけでなく各地の力のある豪族たちが協力し合ってきたのだと思った。前方後円墳を造らなくなるころには、支配力の高まった朝廷が国づくりを進めていったのだろう。この後日本はどうなっていくのだろう。			

[第3時 参考資料]

高度な技術の日本最古の水田：佐賀県「菜畑遺跡」  
菜畑遺跡で発見された最古の水田は、一区画4×7mほどとやや小さく、土を盛った畔と矢板(=地面に打ち込む、先をとがらせた板)でしっかりととのえた水路がついていた。全体に規模は小さいものの、その土木技術は高く、現在の水田と比べて大きな違いはないといっても良い。  
ここでは、ほかの縄文時代の遺跡では、ほとんど見つかっていないかった農耕具も、大量に発見された。  
例  
・稲穂を刈り取るのに使う石包丁や石鎌  
・水田をたがやす道具である諸手鎌、馬鎌(=横木に数本の歯をつけ牛や馬に引かせて耕す道具)  
・田畑を平らにならすための柄振(=T字形の道具)  
イネを脱穀するために使った堅杵などは、つい近年まで農家で使われていたものとそっくりである。  
参考：NHKスペシャル『日本人はるかな旅』NHK出版 P96

---

縄文系・朝鮮半島系の土器：佐賀県「菜畑遺跡」  
菜畑遺跡の土器は、おもに縄文系の「突帯土器」が使われていた。ふちのあたりに、刻みを入れた粘土紐を貼り付けた文様を特徴とする。  
そして、少しではあるが、朝鮮半島系の文様のない「無文土器」とよく似たものが使われていた。それらは、韓国西海岸付近の「休岩里遺跡」などの土器に近いという。  
土器の種類は、貯蔵用の壺・煮炊き用の甕・盛り付け用の鉢などがある。  
参考：NHKスペシャル『日本人はるかな旅』NHK出版 P100

---

弥生時代の人骨：山口県「土井ヶ浜遺跡」  
土井ヶ浜遺跡で見つかった人骨の数は約350で、縄文人の骨とはまったく異なる特徴を持っていることがわかった。  
まず、平均身長が縄文人より4~5cm高かった。  
次に、縄文人がエラの張った四角い顔をしているのに対し、土井ヶ浜の人骨は顔の輪郭が細長くタマゴ型の印象である。  
そこで、頭骨の縦横の長さなど14カ所をくわしく計測し、統計的に分析すると、土井ヶ浜の人びとの骨の形は、日本列島の縄文人とは別のグループに属することが分かった。  
より近いのは、同じ時代の中国の人骨である。  
参考：NHKスペシャル『日本人はるかな旅』NHK出版 P44

[第4時 参考資料]

「魏志倭人伝」(『三国志』「魏書」東夷伝 倭人の条) 部分意約  
王はもとは男であったが、戦乱が続いたので、30余りの国々が共同して女の卑弥呼を王に立てた。その国が「邪馬台国」である。邪馬台国には家が7万戸ほどある。  
卑弥呼は神につかえ、人々の心を引きつけるふしぎな力を持っていた。夫はなく、弟が卑弥呼を助けて国を治めていた。卑弥呼は、宮殿にこもってほとんど姿を見せず、1000人も召使いに囲まれていた。宮殿には、物見やぐらや柵が厳重にめぐらされ、武器を持った兵士がいつも守っていた。

---

239年6月、卑弥呼は魏の皇帝へ使者をおくり貢ぎ物を申し出た。12月、魏の皇帝は、卑弥呼に次のような詔を与えた。  
「汝は、はるか遠くから男生口(奴隷)4人・女生口6人・布2匹2丈を献上し真心をつくした。良い心がけであるので、部下と認める。いま、汝に“親魏倭王”の位を与え、金印を賞し与える。今後も命令を聞きよくつかえよ。  
汝に、2頭の竜を織り込んだ濃い赤色の錦の織物5匹・濃い赤色のちぢみ毛の織物10張・あかね色のつむぎの絹織物50匹・紺青色の織物50匹を与え、貢ぎ物にこたえる。(1匹=4丈か)  
さらに、模様のついた紺色の錦の織物3匹・細かい花模様の毛織物5張・模様のない白い絹織物50匹・金8両・5尺の刀2口・銅鏡100枚・真珠50斤・鉛丹(赤色顔料)50斤を与える。  
受け取ったら、それを國中の人に示し、魏が汝を部下と認めたことを知らせよ。そのために宝を与えるのである。」

---

卑弥呼の倭国と狗奴国とは、長い間争い続けていた。247年、卑弥呼は魏へ使者を送り助けを求めた。  
そこで、魏からは、狗奴国に戦いをやめるよう言い聞かせるための詔書(魏帝の言葉)・魏の軍隊であることを示す黄幢(サオにうつす黄色の旗)とともに、軍事顧問たちが派遣された。

---

卑弥呼が死ぬと、径100歩ほどの大きな墓がつくられ、100人余りの奴隷がいっしょにうめられた。  
参考：安本美典『吉野ヶ里の証言』JICC出版局 P62~71

[第1時] マリタ遺跡・・・NHKスペシャル『日本人はるかな旅』NHK出版  
[第3時] 稲作の起源・・・『まんがでたどる日本人はるかな旅』NHK出版  
[第5時] 愛知県の主要古墳変遷図  
・・・加藤安信『遺跡からのメッセージ』中日新聞社